

杉並区自然環境調査報告書 (第8次) 概要版



令和7年3月 杉並区

はじめに

杉並区ではこれまでに区内の自然環境を知る手がかりとして、自然環境調査を 1985 年度から行ってきました。

この概要版は、これまでの調査内容をより多くの区民の方々に、わかりやすく紹介するために作成しました。「みどり豊かな住まいのみやこ」杉並の生き物たちを少しでも身近に感じていただけると幸いです。

自然環境調査の詳しい内容は、区立図書館や区ホームページで「杉並区自然環境調査報告書」をご覧ください。最新の報告書は、区役所内の区政資料室で冊子を購入することもできます。

最後になりますが、本調査の実施にご協力を頂きました皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

2025 年 3 月

杉並区環境部環境課

目次

はじめに・目次	1
調査の内容	2
調査地点	3
調査結果	4
植物	5
クモ類	9
昆虫類	12
鳥類	16
両生類・は虫類	21
ほ乳類	22
調査地点からみた生物相の特性	23
自然環境調査のまとめ	24
自然観察のポイント	25

調査の内容

杉並区自然環境調査

「杉並区自然環境調査」は、区内の植物、クモ類、昆虫類、鳥類、両生類、は虫類、ほ乳類の調査です。

1985年度から開始し、今回は第8次調査を行いました。第8次調査は2023年度に実施し、クモ類と昆虫類については2022年度にも実施しました。植物、クモ類、昆虫類、鳥類については専門調査員が調査を行い、両生類、は虫類、ほ乳類については区民の協力によるアンケート調査を行いました。

専門調査員による調査の内容

内容		第1次		第2次		第3次		第4次		第5次		第6次		第7次		第8次	
		1985年度	1986年度	1990年度	1991年度	1995年度	1996年度	2000年度	2001年度	2005年度	2006年度	2012年度	2013年度	2018年度	2019年度	2022年度	2023年度
植物	植物	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	-	-	○
	蘚苔類	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
動物	クモ類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	昆虫類	○	○	○	○	○	○	○	○	○*1	○*1	○*1	○*1	○*1	○*1	○*1	○*1
	鳥類	○	○	-	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-	○

*1：昆虫類については第5次から第8次までの調査において「むさしの自然史研究会」の資料提供のご協力により、下記期間の調査記録も採用しました。第5次：2002年1月～2005年3月、2007年4月～9月、第6次：2007年4月～2012年3月、第7次：2013年1月～2018年3月、第8次：2020年1月～2022年8月、2024年4月～7月。

区民の協力によるアンケート調査の内容

内容		第1次		第2次		第3次		第4次		第5次			第6次		第7次	第8次
		1985年度	1986年度	1990年度	1991年度	1995年度	1996年度	2000年度	2001年度	2005年度	2006年度	2007年度	2012年度	2013年度	2018年度	2023年度
植物	春の野草	○	-	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	○	-	-
	夏の野草	○	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	秋の野草	○	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
動物	小動物	両生類	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	○	○
		は虫類	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	○	○
		ほ乳類	-	○	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	○	○
	オニグモ・ジョロウグモ		○	-	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	セミのぬけがらしらべ		○	-	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	春の昆虫		-	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	○	-	-
	夏の昆虫		-	-	-	-	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	秋の昆虫		-	-	-	-	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	鳥の食性調査		○	-	-	-	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	鳥の集団ねぐら		○	-	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	冬の野鳥		○	-	○	○	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	冬の水鳥		-	-	-	-	○	○	○	○	○	-	○	○	-	-
	ツバメの巣しらべ		○	-	○	○	○	○	○	-	○	○	-	○	-	-

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

両生類・は虫類

ほ乳類

調査地点

調査地点は、植物では15地点、クモ類では13地点、昆虫類では7地点、鳥類では20ルートを対象としました。
なお、昆虫類は主要調査地以外でも調査を実施しました。



調査地点	植物	クモ	昆虫
都立善福寺公園			
上池	●	●	●
下池	●		
都立善福寺川緑地			
神通橋～尾崎橋	●	●	●
尾崎橋～白山前橋	●		
都立和田堀公園			
済美山自然林	●	●	
自然観察の森	●	●	●
その他の場所	●	●	
大宮八幡	●	●	
区立塚山公園	●	●	●
区立柏の宮公園	●	●	●
区立三井の森公園	●	●	●

調査地点	植物	クモ	昆虫
区立井草森公園	●		
区立蛭糸の森公園	●		
観音寺	●	●	●
萩窪八幡		●	
下高井戸八幡		●	
浴風園	●	●	
南萩窪4丁目域			●

鳥類調査ルート	
1	和泉2丁目
2	浜田山（柏の宮公園、三井の森公園）
3	久我山1丁目
4	久我山2丁目（神田川沿い）
5	大宮2丁目（大宮八幡、善福寺川、和田堀公園）
6	堀ノ内1丁目、済美山自然林
7	宮前2丁目
8	成田西4丁目（善福寺川緑地）
9	堀ノ内3丁目
10	和田3丁目、蛭糸の森公園
11	西萩南4丁目から南萩窪4丁目
12	松庵1～3丁目
13	萩窪駅から萩窪住宅
14	阿佐谷南1丁目から阿佐ヶ谷駅
15	塚山公園から下高井戸3丁目
16	都立農芸高等学校から観音寺
17	善福寺公園
18	上井草4丁目
19	清水3丁目から妙正寺公園、妙正寺川
20	井草3、4丁目、井草の森公園

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

両生類・は虫類

ほ乳類

調査結果

確認種類数

第8次調査では、右表に示した7分類群全体で2,417種類の動植物を確認しました。その中の114種類が環境省や東京都のレッドリスト掲載種、7種類が特定外来生物、324種類が外来種でした。

注目種

第1次から第8次までの調査で確認された種類の中で、環境省と東京都が公表しているレッドリストの掲載種とその他に杉並区で注目される種を、「注目種」として選定しました。選定の根拠は以下に示すとおりです。

○環境省および東京都レッドリストの該当種

カテゴリ	記号	基本概念
絶滅	EX	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。
野生絶滅	EW	飼育・栽培下、あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種。
絶滅危惧Ⅰ類	CR + EN	現在の状況をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。
絶滅危惧ⅠA類	CR	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
絶滅危惧ⅠB類	EN	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
絶滅危惧Ⅱ類	VU	絶滅の危険が増大している種。
準絶滅危惧	NT	存続基盤が脆弱な種（現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧Ⅰ類」に移行する可能性のある種）。
情報不足	DD	評価するだけの情報が不足している種。
留意種※	*	現時点では絶滅の恐れはないと判断されるため、上記カテゴリには該当しないものの、留意が必要と考えられるもの。
データ無し※	-	当該地域において生育・生息している（していた）可能性があるが、確実な記録や情報が得られなかったもの。
非分布※	.	生態的、地史的な理由から、もともと当該地域には分布しないと考えられるもの。

※東京都レッドリストのみに設けられているカテゴリ

○杉並区独自の注目種の選定基準

植物	・元来、区内での分布が限られ数が少ない種（貴重種、希少種）。 ・元来、区内の広い範囲に分布していたが、近年減少している種。
クモ類	・東京23区内において確認記録が稀な種。 ・元来、北方に生息する種。
昆虫類	・杉並区内において注目されると判断された種。
鳥類	・東京23区内では比較的稀な種（レッドリスト掲載種を除く）。

がいらいしゅ きかしよくぶつ いっしゅつしよくぶつ 外来種・帰化植物・逸出植物

外来種	もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物のことを外来生物または外来種といいます。とくに外国から入ってきた外来種を国外外来種といいます。	逸出植物	栽培などの目的で植えられた植物が、もとの植栽地の外へ逸出して野生化したものを指します。
帰化植物	植物の外来種のうち、野生化し、繁殖し続けているものを帰化植物といいます。一般的に帰化植物と呼ばれるのは江戸時代末期以降に渡来したもので、それ以前に渡来したものと区別して「新帰化植物」と呼ばれます。本書で紹介する帰化植物は、新帰化植物を指しますが、これより前に渡来した旧帰化植物も一部含めました。	特定外来生物	外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）で定められた生物種。飼育・栽培・保管・運搬、輸入、野外へ放つこと、植えることやまくことが原則禁止されています。
		生態系被害防止外来種	生態系被害防止外来種リスト（我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト）に掲載された侵略性が高く、我が国の生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす又はそのおそれがある生物種です。



調査結果の概要

■ 種類数

第8次調査で確認された植物は157科1,119種類で、前回より若干少ない種類数でした。このうち植栽植物を除いた野生植物の種類数は前回と同程度の746種類で、これは全体の67%を占めました。

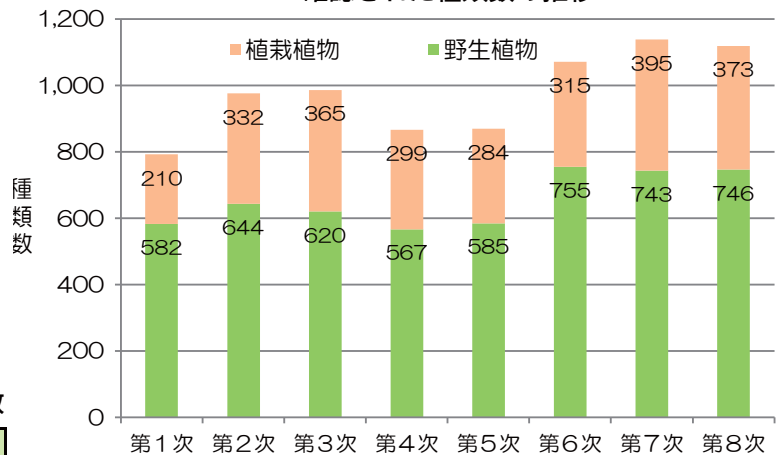
これまでの調査の合計は180科1,726種類で、このうち野生植物が1,132種類、植栽植物が594種類です。

第8次調査で確認された分類群ごとの種類数

分類群		科数	種類数
シダ植物		14	51
種子植物	裸子植物	7	33
	被子植物	136	1,035
合計		157	1,119

注) 分類群ごとの種類数は、野生植物と植栽植物を合わせた値です。報告書本編では分類群ごとの種類数は野生種のみについて記載しているため、本表の値と異なります。

確認された種類数の推移



分類群ごとの主な植物

シダ植物



イヌワラビ

種子植物（裸子植物）



アカマツ

種子植物（双子葉植物）



タンポポ類

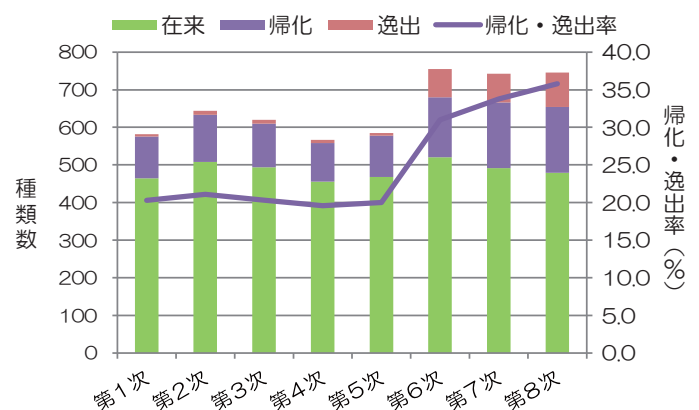
■ 野生植物の由来

野生植物の生育由来は、元々杉並区に生育する在来植物、主として江戸時代末期以降に外国から杉並区に侵入して定着した帰化植物、植栽された植物から自然に分布を広げた逸出植物の3タイプに分けられます。逸出植物には原産地が国内の植物も含まれます。

野生植物全体の種類数に対する帰化植物の種類数の割合を帰化率といいます。帰化率は一般的に都市化の指標とされています。第6次以降に逸出種の種類数が増加したため、今回は帰化植物と逸出植物をあわせた種類数の割合を帰化・逸出率として示しました。

第8次調査では、前回の調査と比べ在来植物の種類数が減少した一方、帰化植物と逸出植物の種類数が増加したため、帰化・逸出率のさらなる上昇がみられました。

野生植物の由来構成と帰化率の推移



注目種

第8次調査では55種類の注目種が確認されました。このうち20種類は、これまでの調査で毎回確認されており、マツモ、ミゾハコベ、クチナシグサの3種類が初めて野生植物として確認されました。クチナシグサは低く刈取られた明るい林床などに生育する種で、都内区部では現在絶滅種とされており、今回の杉並区での確認は区部で1946年以来となります。

注目種は柏の宮公園でとくに多く28種類が確認され、次いで善福寺公園下池、善福寺公園上池、和田堀公園、三井の森公園の順に多く、10種類以上が確認されました。これらの場所では、植生管理や、区内の開発等で失われようとする地域からの移植などを含めた保全活動により、維持されている種類もあります。



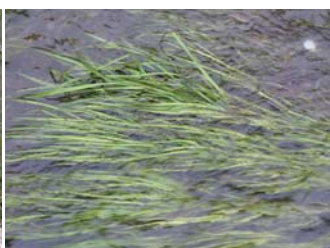
クチナシグサ
(都区部 EX)



オキノヤガラ
(都区部 CR)



エビモ
(都区部 CR)



ナガエミクリ
(環境省 NT / 都区部 VU)



ノジトラノオ
(環境省 VU / 都区部 CR)

帰化植物・逸出植物

帰化植物は水辺、路傍や空き地などの明るい草地でよく見られます。

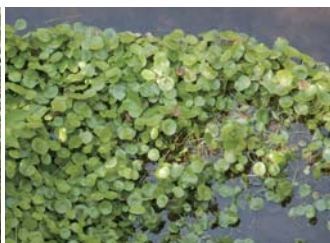
第8次調査では帰化植物が175種類、逸出植物が92種類確認されました。このうちオオフサモ、アレチウリ、オオカワヂシャは特定外来生物に指定されるとともに、生態系被害防止外来種（緊急対策外来種）に選定されています。このほか、セイタカアワダチソウ、トウネズミモチ、ウチワゼニクサなどの60種類以上が生態系被害防止外来種に選定されています。また、コネズミガヤやツタスミレなどの帰化植物や逸出植物も新たに確認されました。



アレチウリ



オオカワヂシャ



ウチワゼニクサ



コネズミガヤ

ナラ枯れとその影響

前回第7次調査から今回第8次調査までの間に、区内のコナラ林などで顕著なナラ枯れの被害が発生しました。カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌によってコナラ等の樹木が枯れるナラ枯れは、近年、都内各地の雑木林などで認められ、被害木の伐採等の対策が講じられています。杉並区でも善福寺公園などで多くの被害木が伐採され樹林環境が変化しました。三井の森公園や柏の宮公園では被害木の伐採後にコナラの苗木が植栽され後継樹として育成されています。

ナラ枯れ被害木の伐採により明るくなった雑木林の林床



杉並区の植物の特性

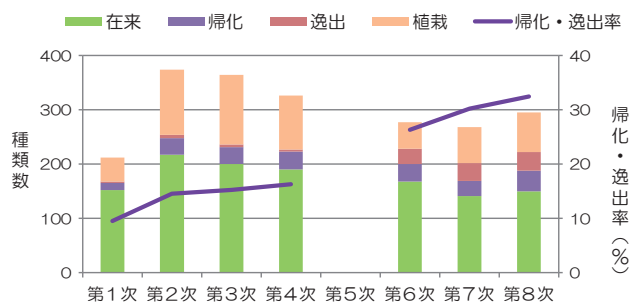
■ 社寺林・屋敷林や暗い樹林に生育する植物

杉並区の自然は、市街地の中に樹林や水辺等の自然が孤立して点在する典型的な都市型の自然といえます。

社寺林や屋敷林は杉並区の自然の中では最も自然性の高い樹林です。常緑樹が主体であるため、樹林内はいつも薄暗い環境です。

観泉寺や大宮八幡には、まとまりのある常緑樹林が残されています。常緑樹林が主体の観泉寺では、第3次調査以降、在来種の生育種類数が徐々に減少していましたが、今回は増加に転じました。

観泉寺での出現種類数と帰化率の推移



注) 第5次調査では、観泉寺の調査は行われませんでした。



イノデ



サネカズラ



ナガバジャノヒゲ



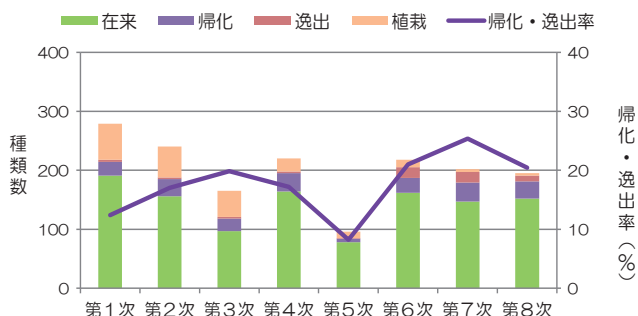
アオキ

■ 雑木林や明るい樹林に生育する植物

第8次調査では、雑木林や明るい樹林に生育する植物が比較的多く確認されました。雑木林はコナラを主体とした落葉広葉樹林であり、その他の明るい樹林にはアカマツ林などがあります。これらの樹林は“二次林”と呼ばれ、定期的な樹木の伐採や林床の草刈りなどの管理をせず放置すると、シラカシなどの常緑樹が増え、暗い常緑樹林に変化していきます。

済美山自然林や柏の宮公園などの雑木林では近年樹林管理が継続されており、第6次以降は150種類前後の在来種が安定して確認され、様々な林床植物の貴重な生育地となっています。三井の森公園や善福寺公園などの雑木林が主体の調査地では近年ナラ枯れが発生し、被害木が伐採されたことにより明るい環境が増えたことで、明るい林床を好む植物の種類が増加した可能性も考えられます。

済美山自然林での出現種類数と帰化率の推移



オオハナワラビ



ヒトリシズカ



キンラン



ヒカゲスゲ

■ 林縁に生育する植物

林縁とは、樹林地と草地や裸地が接する境界部分のことです。陽光が当たる林縁の環境は、薄暗い林内とは大きく異なりますが、背後に樹林地があるため空き地などの草地環境とも異なり、林縁特有のつる植物のほか、明るい樹林の植物や草原に生育する植物が混生します。



カニクサ



ノブドウ



ニガイチゴ



スイカズラ

■ 草地に生育する植物

杉並区の草地環境は、様々な公園の芝生地や植栽地のほか、河川や鉄道沿いの土手や路傍^{ろぼう}などに見られます。第8次調査では、草刈り等の管理が行われている善福寺公園や柏の宮公園、善福寺川緑地などで、草地に生育する様々な在来の植物が確認されました。善福寺公園や和田堀公園などではこれらの植物の種類数が増加しており、ナラ枯れ被害木の伐採により明るい環境が増えた影響が考えられます。一方、明るい草地は帰化植物が生育しやすい場所でもあるため、適切な管理が必要です。



ノカンゾウ



アリアケスミレ



ガガイモ



カントウヨメナ

■ 水辺に生育する植物

杉並区では自然の水辺は多くありませんが、第8次調査では、善福寺公園、和田堀公園、井草森公園の池の周りや善福寺川沿い、柏の宮公園の水田等で多くの水辺の植物が確認されました。その他に浴風園などの湿り気のある場所にも水辺の植物が残されています。



コウヤワラビ



コガマ



コウガイゼキショウ

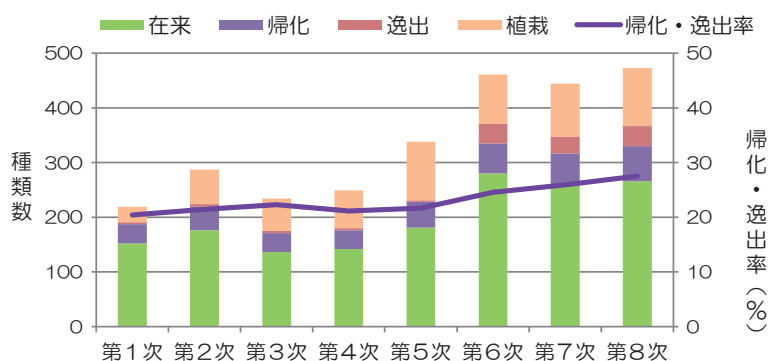


シロバナサクラタデ

■ 区民による保全活動

柏の宮公園や善福寺公園下池では、第5次調査の後に区民団体による雑木林管理や水田耕作、草刈り等の植生管理が継続的に行われるようになり、在来種の種類数が大きく増加しました。第8次調査が行われた時点では、このような雑木林や草地の管理は三井の森公園、済美山自然林、塚山公園、善福寺川緑地など、他の多くの緑地でも行われています。第8次調査では在来種の大きな増加はみられなかったものの、第6次や第7次の種類数の水準は概ね維持されています。今後もこのような生物に配慮した取り組みが多く緑地で行われることにより、杉並区の自然は維持されていくと考えられます。

善福寺公園（下池）での出現種類数と帰化率の推移



クモ類

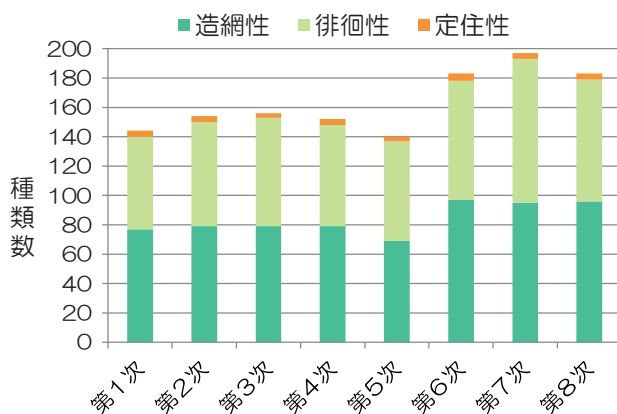


調査結果の概要

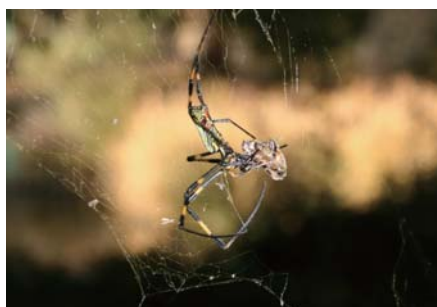
第8次調査で確認されたクモ類は36科183種類で、前回より若干減少し、第6次と同じ程度となりました。このうちヒメグモ科が37種と最も多く、次いでハエトリグモ科の25種、コガネグモ科の24種、サラグモ科の17種、カニグモ科の11種、アシナガグモ科の10種と続き、これらの6科で全体の68%を占めました。種類数の増加は、温暖化により暖地性の種類が増えたことも一因として考えられます。これまでの調査での合計は42科294種類となりました。

クモ類は餌のとり方（採餌行動様式）によって、ぞうもうせい造網性、はいかいせい徘徊性、ていじゅうせい定住性に区分されます。第7次調査では徘徊性のクモ類が大きく増加しましたが、今回は第6次までと同様に、造網性と徘徊性のクモ類の種類数は同程度となりました。

採餌行動様式ごとの出現種類数の推移



採餌行動様式



造網性
(網を張って獲物を捕らえる)
(例：ジョロウグモ)



徘徊性
(歩きまわって獲物を探す)
(例：ネコハエトリ)



定住性
(地面などに穴を掘って獲物を待ち構える)
(例：カネコトタテグモ)

注目種

第8次調査では23種類が確認され、これまでの調査と合わせると36種類が確認されました。このうち環境省および東京都のレッドリスト掲載種は11種類でした。

確認された主な注目種

○アワセグモ（アワセグモ科）

杉並区で最も注目すべき種類です。東京都23区内では非常に稀な種であり、杉並区のほか渋谷区でも確認されています。

○スズミグモ（コガネグモ科）

南方系の種類で、1980年以降、急速な北上傾向を示し、現在都内の各所で採集されています。



アワセグモ
(都区部 VU)



スズミグモ
(杉並区注目種)

○チュウガタコガネグモ（コガネグモ科）

都市部ではほとんどみられない種類で、山地から飛来してきた子グモが成長したものと思われます。

○ゲホウグモ（コガネグモ科）

23 区内には少ない種類で、第 8 次調査で初めて柏の宮公園で確認されました。

○アシヨレグモ（サラグモ科）

里山から山地にかけて生息する種類で都市部ではほとんどみられません。三井の森公園で確認されました。

○ウコンフクログモ（フクログモ科）

詳しい生態は不明で、全国の採集記録は少なく分布状況も把握されていません。第 8 次調査で初めて済美山自然林で確認されました。



チュウガタコガネグモ
(都区部データなし／杉並区注目種)



ゲホウグモ
(杉並区注目種)



アシヨレグモ
(杉並区注目種)



ウコンフクログモ
(杉並区注目種)

外来種

第 8 次調査では、ハルカガケジグモ、ナナホシヒメグモ、シロホシヒメグモ、マダラヒメグモが確認されました。ハルカガケジグモ、ナナホシヒメグモは今回の調査で新たに確認されました。ハルカガケジグモは東京都では 1995 年 12 月に品川区八潮において最初に記録されて以来、分布を広げています。ナナホシヒメグモは南方系の種類で 1980 年以降急速に北上しています。



ハルカガケジグモ



ナナホシヒメグモ

杉並区のクモ類の特性

■ 杉並区内でよく見られる代表的なクモ類

建造物の壁などに巣をつくるヒラタグモは全 14 調査地点で確認されました。

注目種であるキシノウエトタテグモは地中に穴を掘る定住性のクモで、7 調査地点で確認されました。都市型のクモで 23 区には普通に生息していますが、東京を離れると急激に減少し、見られなくなります。

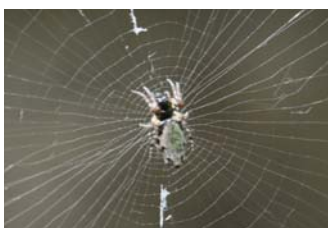
ササグモは庭の草木の葉上などにも普通に見られる種類です。



コクサグモの棚網



ヒメグモ



ギンメッキゴミグモ



ササグモ



オオヒメグモ



ジョロウグモ



アサヒエビグモ



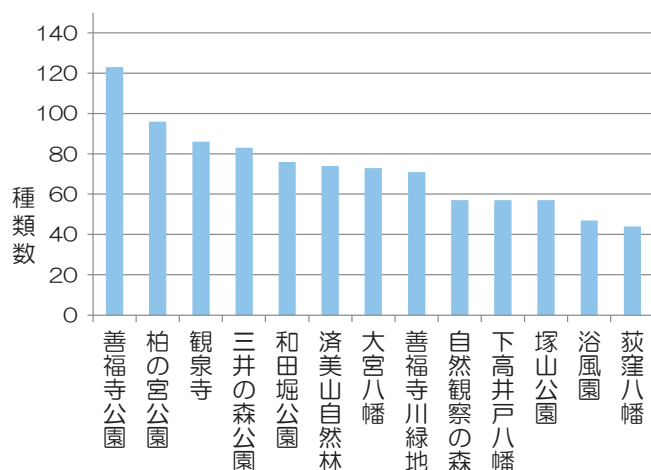
ワカバグモ

■ クモ類からみた自然環境

調査地点別の種類数は、善福寺公園で 29 科 123 種、柏の宮公園で 29 科 96 種などとなりました。善福寺公園や柏の宮公園は整備された都市公園でありながら適度な高木・低木・草地とともに池などの水辺環境もあり多様な環境が存在することから、それぞれの環境を選好するクモ類の生息が可能となっていると考えられます。このほか観泉寺、三井の森公園、和田堀公園、済美山自然林、大宮八幡などにも適度な樹林地と下草や落葉などの環境が残されています。

一方、今回の調査では土壌性のクモ類の個体数の減少が目立ったことから、区内全域で土壌の乾燥化が進行していると考えられます。

調査地点別の確認種類数



■ 新たに確認された種類

第8次調査ではジャバラハエトリ、ヤマシロオニグモなど 18 種類のクモ類が新たに確認されました。このうちクスミダニグモ、オダカグモ、マダラミジグモ、マルムネヒザグモ、アシヨレグモ、ヒカリアシナガグモ、オガタオニグモ、チュウガタコガネグモ、ゲホウグモ、ヤドカリグモ、ウコンフクログモ、シナノヤハズハエトリの 12 種類は、いずれも都区内にはほとんど生息していないクモで、多くは多摩地域の山地から幼体期（一部成体でも飛行する）に飛んできて杉並区内で成長したと考えられます。

新たに確認されたクモ類のうちオダカグモ、ナナホシヒメグモ、チュウガタシロカネグモ、ヒカリアシナガグモは、いずれも南方系のクモ類で、第6次、第7次に続き、新たな南方系の種類が増加しています。

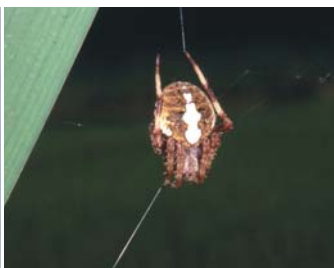
一方、シナノヤハズハエトリは主に長野県や関東地方北部の高山に生息する北方系のクモで関東地方南部からの記録はほとんどなく、杉並区での北方系種の確認は初めてであり注目されます。



シナノヤハズハエトリ：北方系種



ジャバラハエトリ



ヤマシロオニグモ



オダカグモ



ヤドカリグモ

昆虫類



調査結果の概要

種類数

第8次調査で確認された昆虫類は17目207科1,031種類でした。

目別の構成をみると、チョウ目が284種類で全体の約28%を占め、次いでコウチュウ目が264種類で約26%、カメムシ目が177種類で約17%、ハチ目が109種類で約11%で、この4目で全体の80%以上を占めました。

これまでの調査と合わせると、277科2,060種類が確認されました。

第8次調査で確認された昆虫類の種類数

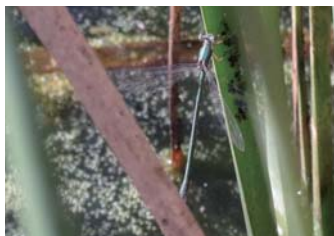
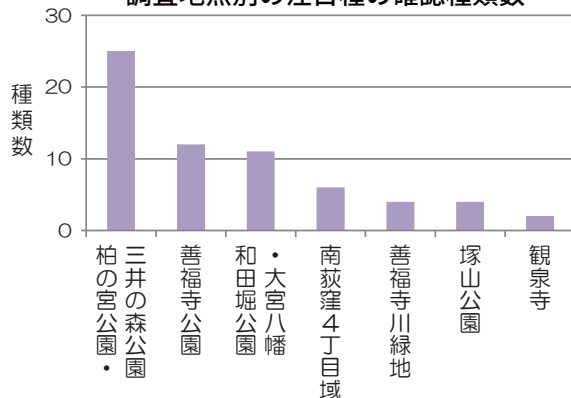
目名	科数	種類数
カゲロウ	3	4
トンボ	9	35
ハサミムシ	1	3
ナナフシ	1	1
カマキリ	1	5
ゴキブリ	2	3
シロアリ	1	1
バッタ	9	39
カジリムシ	3	5
カメムシ	47	177
ラクダムシ	1	1
アミメカゲロウ	5	13
トビケラ	2	2
コウチュウ	42	264
ハチ	23	109
ハエ	27	85
チョウ	30	284
(チョウ類)	5	46
(ガ類)	25	238
合計	207	1,031

注目種

第8次調査では6目24科33種類の注目種が確認されました。最も多く確認されたのは、「柏の宮公園、三井の森公園およびその周辺」の25種類、次いで「善福寺公園およびその周辺」の12種類でした。これまでの調査と合わせると、8目41科83種類が確認されました。

前回までの調査と同様に、柏の宮公園には樹林、草地、水辺などの多様な環境があることに加え、生物に配慮した管理が行われているため、多くの注目種が確認されたと考えられます。

第8次調査における
調査地点別の注目種の確認種類数



アオイトトンボ (都区部 VU)



オツネイトンボ (都区部 CR)



ハグロトンボ (都区部 VU)



マユタテアカネ (都区部 EN)



エサキアメンボ
(環境省 NT / 都区部 DD)



アカシジミ
(環境省 VU)



ヒカゲチョウ
(都区部 NT)



オオミズアオ
(都区部 VU)

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

両生類・は虫類

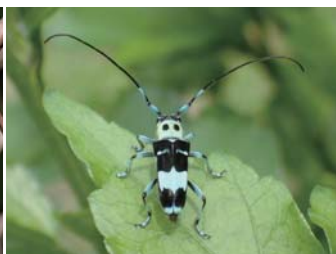
ほ乳類

外来種

第8次調査では、32科46種類が確認されました。第4次調査までは19～25種類で推移していましたが、第5次調査以降は35～39種類となり、第8次にはさらに増加しました。第8次調査では、ムネアカハラビロカマキリ、ラミーカミキリ、クズクビボソハムシ、チュウゴクアミガサハゴロモなどの13種類が新たに確認されました。これまでの調査を合わせると、56科90種類が確認されました。一時的に確認され杉並区には定着しなかった種類もありますが、今後の動向に注意する必要があります。



ムネアカハラビロカマキリ



ラミーカミキリ



クズクビボソハムシ



チュウゴクアミガサハゴロモ

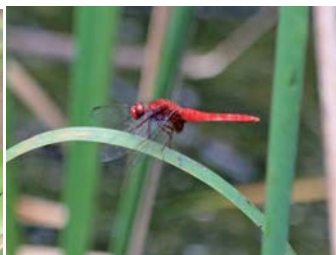
杉並区の昆虫類の特性

■ 杉並区でよく見られる種類

第8次調査の多くの地点で、都市部の公園や人家の庭などでも生育できる種類が見られたほか、池や河川などの水辺に生育する種類も広く見られました。



オオシオカラトンボ



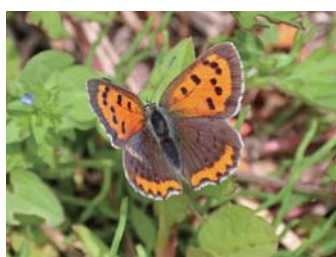
ショウジョウトンボ



クビキリギス



ショウリョウバッタ



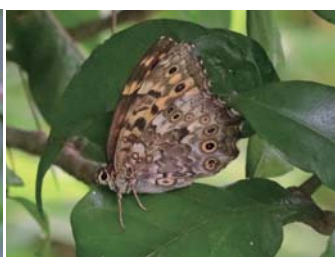
ベニシジミ



ヤマトシジミ



アゲハ



サトキマダラヒカゲ

■ 都市型の種類が生息

都市環境に生息する昆虫類が多く確認されました。その中には、人間が植えた園芸植物を利用する種類や、移植木等と一緒に持ち込まれた種類、人の手によって放虫された種類も見られました。ツマグロヒョウモンは庭に植栽されるパンジーやビオラも利用します。また第7次・第8次調査で確認されたシラホシハナムグリについては、現在生息するものは植栽木等とともに移入された個体群に由来すると考えられています。



ツマグロヒョウモン



シラホシハナムグリ

■ 増加した昆虫

これまでの調査結果から、在来種、外来種ともに暖地性の昆虫類が増加している傾向がみられました。

アオドウガネ、ツマグロヒョウモンなどは、2000 年代以降、区内に定着しています。また、ホソミイトトンボは第 6 次調査以降、モンクチビルテントウや外来種のキマダラカメムシは第 7 次以降に確認され、これらも区内に定着したものと考えられます。



アオドウガネ



ホソミイトトンボ



モンクチビルテントウ



キマダラカメムシ

■ 減少した昆虫

過去の調査で確認されていたセスジイトトンボ、オオチャバネセセリ、クルマバッタなどの種類は、近年記録が途絶え、東京都区部の他の地域でも同様に記録がほぼ途絶えています。この要因として、生息環境の消失や改変などのほか、気象の変化による夏季の極端な高温や、年間を通じた湿度の低下といった様々なことが考えられます。このほか区内では、ノシメトンボ、ハラオカメコオロギ、アオオサムシ、ヒグラシ、キアゲハ、スジグロシロチョウなどの確認地点数や確認例数も減少傾向にあります。

■ 区民による保全活動

第 8 次調査では 35 種類のトンボ類が確認され、そのうち 27 種類が柏の宮公園で確認されました。柏の宮公園には「水生生物の池」、「水田」、「日本庭園池」の三つの水辺があります。池や田んぼでは様々なトンボや昆虫類が育ち、日本庭園池は日陰を好む昆虫類が生息しています。関東で成虫で冬を越す三種のトンボ（ホソミオツネントンボ、オツネントンボ、ホソミイトトンボ）全てが公園内で確認されており、都内では珍しい環境です。また、園内にはクヌギ・コナラ林や多種の樹木があることチガヤ草地など、豊かな生態系が形成されています。公園の自然環境はボランティアグループと区の連携によって適切に維持されています。

柏の宮公園の例からも、適切な環境の創設と管理によって、区内の他の場所でも多様な生物が生息する豊かな環境を作ることができると期待されます。



柏の宮公園の「水田」での稲刈り風景

柏の宮公園で確認されたトンボ類



ホソミオツネントンボ
(都区部 VU)



リスアカネ
(都区部 NT)



マルタンヤンマ



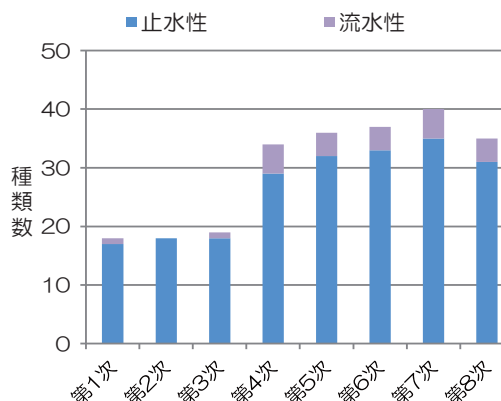
ナツアカネ

■ トンボ類の生息状況の年次変化

トンボ類を、池などの止水域^{しすいいき}に生息する種類と、河川などの流水域に生息する種類に分類し、確認種類数の年次変化をみると、杉並区のトンボ類の多くは止水性で、止水性・流水性ともに第4次調査以降に大きく増加しました。これは池を有する公園や河川の環境が改善したことなどが影響していると考えられます。

流水性のコオニヤンマは第5次調査から確認され、現在では区内の複数の地域で見られるようになりました。

トンボ類の生息環境別の確認状況



止水性（コシアキトンボ）



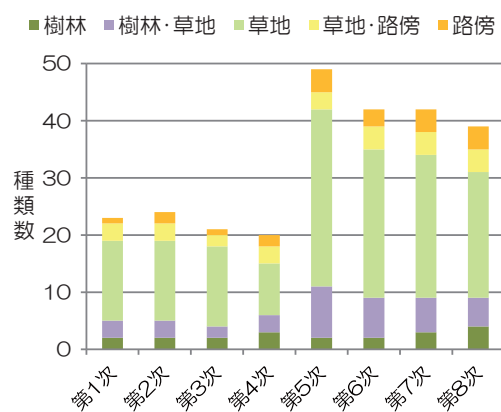
流水性（コオニヤンマ）

■ バッタ類の生息状況の年次変化

バッタ類の確認種類数を、樹林、草地、路傍といった生息環境別にみると、杉並区のバッタ類の多くは草地^{くさばら}に生息する種類で、樹林や路傍に生息する種類は少ない傾向にあります。年次変化をみると、草地に生息する種類は第5次調査で大きく増加しましたが、その後は緩やかな減少傾向が見られます。

現在、公園などにある草地環境がバッタ類の重要な生息環境となっていますが、樹林から林縁、草地が連続する環境を維持・創出することにより、さらに多様なバッタ類が生息できる環境になると考えられます。

バッタ類の生息環境別の確認状況



※樹林・草地、草地・路傍は、2つの環境を利用するバッタ類です。



樹林性（カネタタキ）



草地性（ショウリョウバッタモドキ）

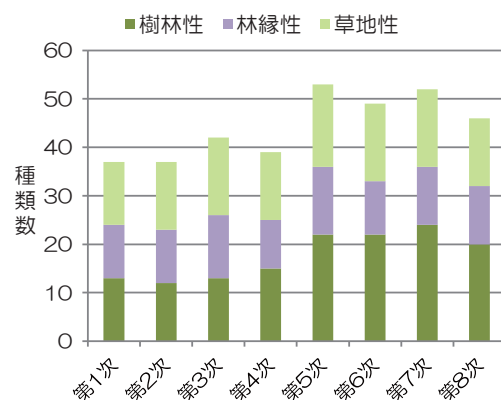


路傍性（エンマコオロギ）

■ チョウ類の生息状況の年次変化

杉並区は2000年以降のチョウ類の確認種類数が67種類と、東京都の区部では最も多く、多様なチョウ類が生育できる環境が存在しています。これまでに確認されたチョウ類を樹林、林縁、草地の生息環境別に分類し、それぞれの年次変化を見ると、樹林性のチョウ類が第5次調査以降増加しました。これは、樹林環境の改善によるものと考えられますが、ナガサキアゲハなどの暖地性^{だんちせい}の種類やテングチョウなどのように周辺地域から飛来した種類が増えていることも要因の一つと考えられます。直近の第7次から第8次にかけては樹林性と草地性のチョウ類で若干の減少がみられました。

チョウ類の生息環境別の確認状況



樹林性（ルリタテハ）



林縁性（コムシジ）



草地性（ツバメシジミ）



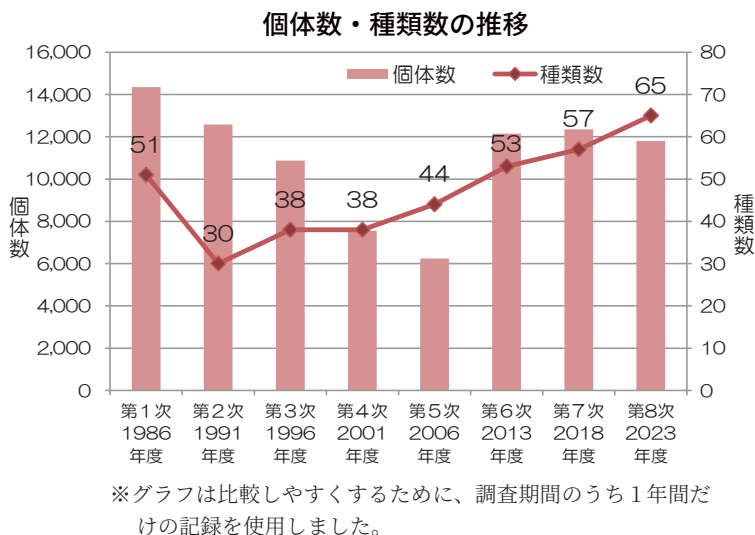
調査結果の概要

■ 個体数と種類数の推移

調査方法は、区内のさまざまな環境を含んだ 20 カ所で約 1 km のコースを設定し、調査を実施しました。

第 8 次調査で確認された種類は 65 種類で、これまでの調査と合わせると、16 目 36 科 82 種（外来種を含む）が確認されました。

種類数は、第 3 次調査から増加傾向にあります。また個体数は、第 5 次調査まで減少傾向にありましたが、第 6 次調査で大きく増加し、その後は年間 11,000 ～ 12,000 個体で推移しています。



注目種

第 8 次調査では、8 目 16 科 22 種類の注目種が確認されました。第 1 次から第 8 次調査までを合わせると、12 目 22 科 34 種類となりました。水鳥では、コサギやカワセミが増加している一方で、第 1 次調査から善福寺池などにおいて見られてきたカイツブリとバンは減少傾向にあります。特にバンについては今回確認することができなかったため、今後の動向に注意する必要があります。また近年、ツミやオオタカなどの猛禽類は、安定した個体数を維持し確認されています。



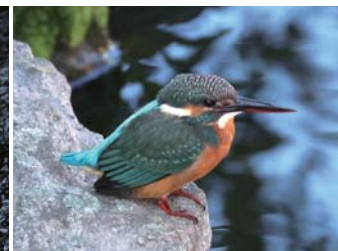
オオタカ
(環境省 NT、都区部 CR)



カイツブリ
(都区部 NT)



コサギ
(都区部 VU)



カワセミ
(都区部 VU)

外来種

第 8 次調査で、コジュケイ、カワラバト（ドバト）、ホンセイインコ、ガビチョウの 4 目 4 科 4 種が確認されました。この内、ガビチョウは特定外来生物に指定されており、現時点では杉並区に定着していないものと考えられますが、今後の生息状況の推移には注意が必要です。



ホンセイインコ
(亜種ワカケホンセイインコ)



ガビチョウ
(特定外来生物)

第8次で初めて確認された鳥類

第8次調査で初めて確認された鳥類は、3目5科5種です。このうち、リュウキュウサンショウクイとハチジョウツグミは、2024年9月に発行された「日本鳥類目録改訂第8版」から種として記載されました。リュウキュウサンショウクイは、南方系の鳥類でしたが、近年分布を北に拡大していると言われています。



ヨシガモ



リュウキュウサンショウクイ



ノスリ



ハチジョウツグミ

杉並区の鳥類の特性

■ 杉並区でよく見られる鳥類

第8次調査で多くの個体が確認された上位5種は、ヒヨドリ、カワラバト(ドバト)、ムクドリ、メジロ、シジュウカラでした。第6次まで最も多く確認されていたスズメが減少傾向である一方、樹林性のメジロ、シジュウカラは近年都市域まで分布を拡大し、増加傾向にあります。



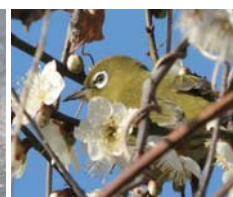
ヒヨドリ



カワラバト(ドバト)

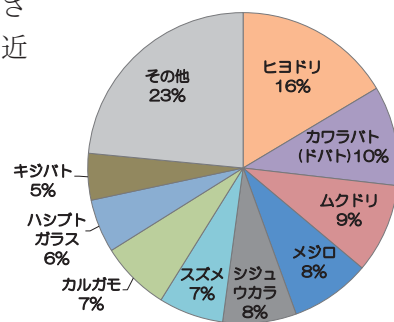


ムクドリ



メジロ

第8次調査で確認された
個体数が多い野鳥



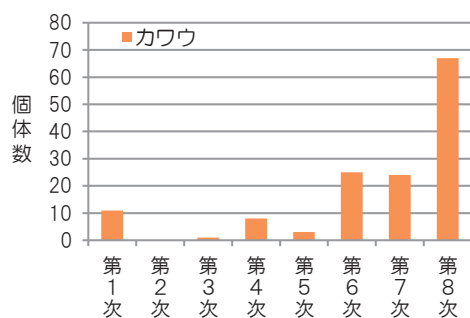
■ 増加傾向にある鳥類

○ カワウ

魚を食べる大型の水鳥で、全身が黒く、樹上に集団で営巣することが特徴です。第2次から第3次にかけては、ほとんど確認されませんでした。第6次以降増加をはじめ、第8次では、67羽が確認されました。



カワウ

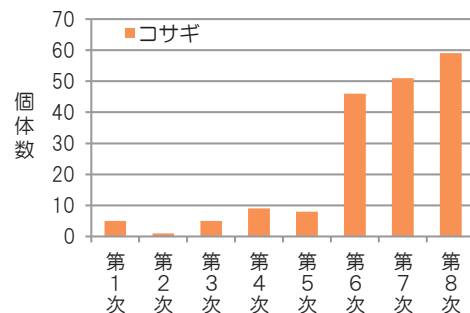


○ コサギ

全身が白い小型のサギで、足は黒く、足指は黄色いのが特徴です。第5次までは9羽未満でしたが、第6次以降大きく増加し、第8次では59羽が確認されました。第7次以降は1年を通して確認されています。



コサギ

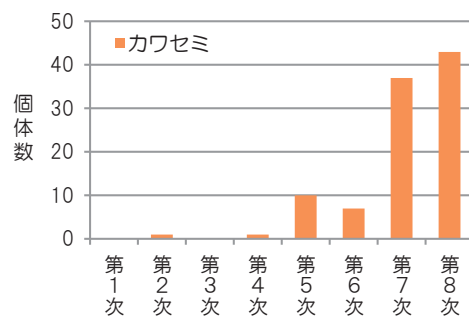


○カワセミ

ほぼスズメ大の大きさですが、大きな頭と、長いくちばしが特徴です。第5次までは善福寺公園などの池でのみ確認されていましたが、第6次以降は河川でも見られるようになり、第7次以降は1年を通して見られるようになりました。



カワセミ

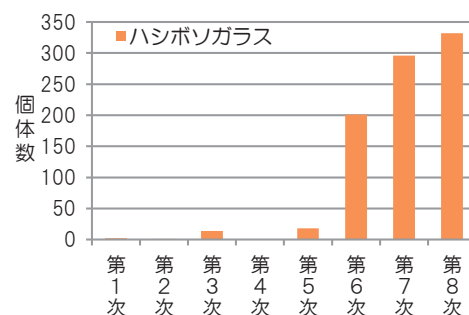


○ハシボソガラス

全身が黒く、くちばしがやや細いのが特徴のカラスの仲間です。第5次までは20羽以下の確認が続いていましたが、第6次で201羽まで増加し、第8次では332羽を確認しました。



ハシボソガラス

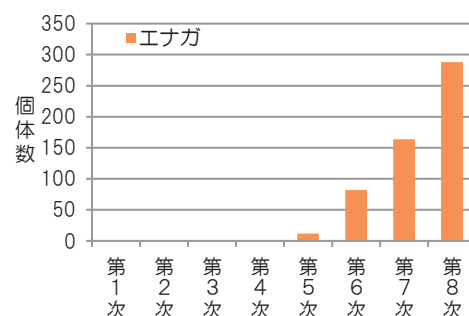


○エナガ

スズメよりやや小さく、長い尾羽と短いくちばしの特徴です。元々樹林性の種類ですが、近年、東京都の都市部でも確認されています。杉並区では第5次に初確認されて以降増加が続いており、第7次では繁殖も認められました。



エナガ

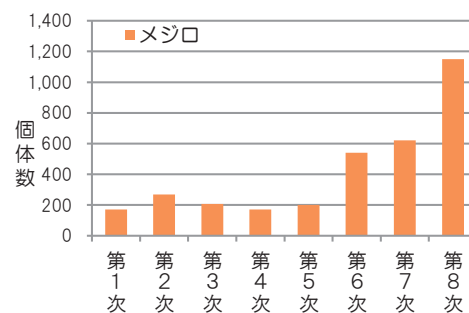


○メジロ

スズメよりやや小さく、目の周りが白いのが特徴です。第6次から個体数が増加しており、特に10月から翌年2月にかけて多くの個体数が確認されています。エナガと同様に、元々樹林性の種類ですが、今では区内の公園や街路樹でも見ることができます。



メジロ

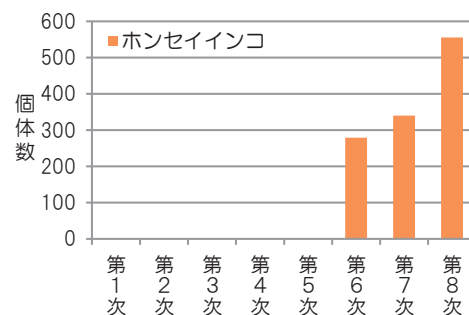


○ホンセイインコ

全身が黄緑色で、尾羽が長いインコの仲間です。第6次に調査対象になって以降増加傾向で、第8次では556羽を確認し、10年前と比較すると約2倍になりました。亜種ワカケホンセイインコは環境省が指定する生態系被害防止リストに掲載されているため、今後の動向に注意する必要があります。



ホンセイインコ
(亜種ワカケホンセイインコ)



※グラフは比較しやすくするために、調査期間が2年間に及んでいた場合、そのうち1年間だけの記録を使用しました。(第1次：1986年度、第3次：1996年度、第4次：2001年度)

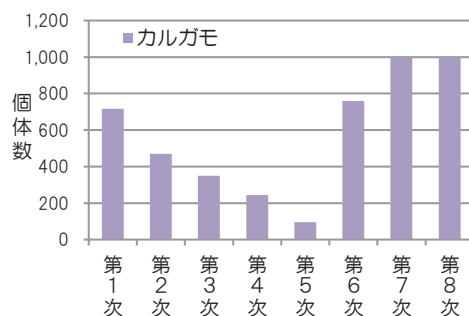
■ 一時減少したが、再び増加傾向にある鳥類

○ カルガモ

クリーム色の顔に特徴的な黒い線が入るカモの仲間です。1年中見られる留鳥ですが、第8次では、10月から翌年3月にかけて特に多くの個体数を確認しました。第5次まで減少していましたが、第6次からは増加しています。



カルガモ

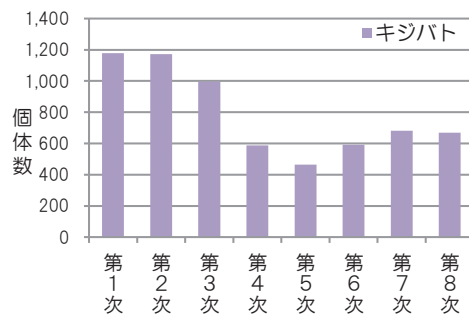


○ キジバト

背や翼の羽に薄茶色の縁取りのあるハトの仲間です。第1次から第2次にかけて1200羽程度が確認されていましたが、第3次から減少しはじめ、第5次では464羽まで減少しました。第6次からは徐々に回復傾向にあります。



キジバト

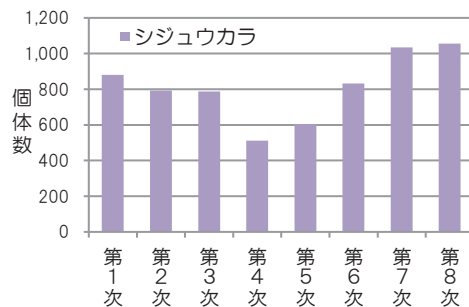


○ シジュウカラ

スズメほどの大きさで、黒い頭に白いほほが特徴のカラ類です。1年中見られる留鳥で、樹林地だけでなく、公園や庭などでもみられ、巣箱もよく利用します。第4次調査で減少しましたが、第5次からは増加傾向にあります。



シジュウカラ

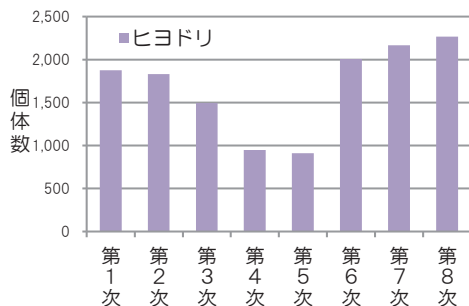


○ ヒヨドリ

全体的に灰色に見えますが、耳の周りが茶色いのが特徴です。第1次から第5次にかけて減少しましたが、第6次からは増加しています。第6次以降は、10月から翌年4月にかけて特に多くの個体数が確認されています。



ヒヨドリ



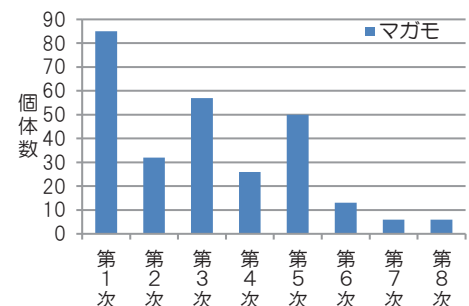
■ 減少傾向にある鳥類

○ マガモ

雄の濃い緑色の頭が特徴で、冬季に見られる水鳥です。第1次では85羽が確認されましたが、その後増減を繰り返しながら減少傾向にあります。第8次では善福寺池のみで見られ、6羽が確認されました。

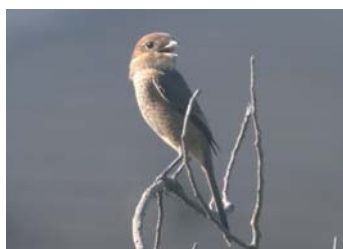


マガモ

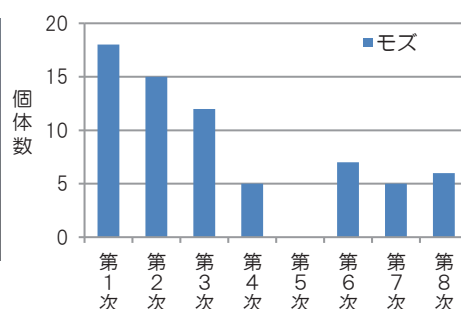


○モズ

鋭いくちばしをもち、昆虫類、両生類、は虫類などの小動物を食べます。第1次以降減少しており、第5次では確認されませんでした。エサとなる小動物の減少や、モズの好む二次林や藪などの環境が減ったことなどが、減少の要因として考えられます。



モズ

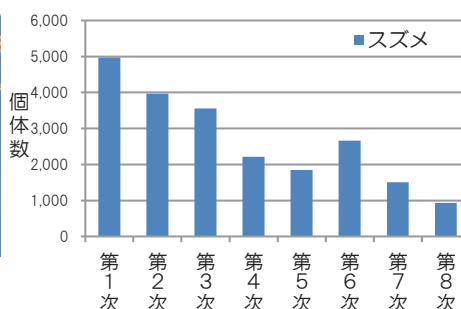


○スズメ

人家付近を住処とし、イネ科などの草本の種子を好んで食べます。杉並区では比較的良好に見られますが、第1次から第8次にかけて79%減少しました。近年の気密性の高い住宅が増えたことにより、スズメが巣を作る場所が減少したことが要因の一つとして考えられます。



スズメ



○ツバメ

杉並区に渡来する代表的な夏鳥で、家の軒先などに巣をつくる身近な鳥です。増減を繰り返しながらも徐々に減少する傾向にあります。飛翔昆虫の減少や、営巣環境の変化が減少要因として考えられます。



ツバメ

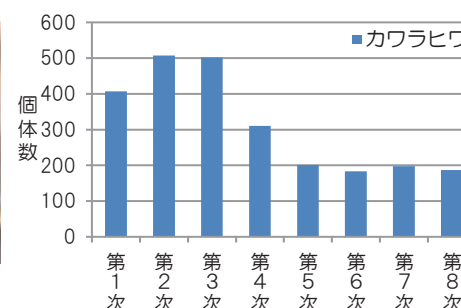


○カワラヒワ

スズメ程度の大きさで、ピンク色のくちばしと、羽の黄色の紋が特徴です。第3次から第4次にかけて減少しました。はっきりとした原因はわかりませんが、カラスが増加したことも原因の一つになっている可能性が有ります。



カワラヒワ

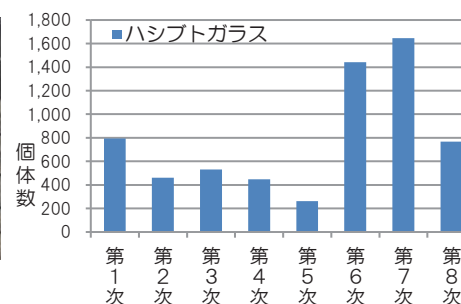


○ハシブトガラス

ハシボソガラスよりも大きな体と、先が大きく湾曲した上くちばしの特徴のカラスの仲間です。第6次から第7次では増加していましたが、第8次では大きく減少しました。特に和田堀公園で大きく減少しました。



ハシブトガラス



両生類・は虫類



調査結果の概要

第8次調査で確認された両生類は、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエルの2科2種類でした。このうちシュレーゲルアオガエルはペットの逃げ出しか、^{ほうちく}放逐による一時的な出現と考えられます。

は虫類は、ニホンイシガメ、ニホンスッポン、ニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲ、ニホンカナヘビ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシと、外来種であるクサガメ、ミシシippアカミガメの2目7科10種類が確認されました。

注目種

第8次調査で確認された10種類の在来種はいずれも環境省や東京都レッドリストで絶滅危惧種に指定されています。アズマヒキガエルやニホンヤモリ、ヒガシニホントカゲなど区内に広く生息している種類がいる一方で、ヤマカガシやヒバカリなどは確認された回数が少なく、確認された地点も区内の一部に限られていました。



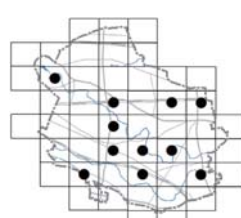
アズマヒキガエル (都 VU)



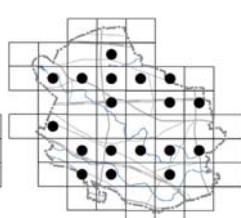
ニホンヤモリ (都 VU)



ヒガシニホントカゲ
(都 CR+EN)



アズマヒキガエル
の確認地点



ニホンヤモリ
の確認地点

外来種

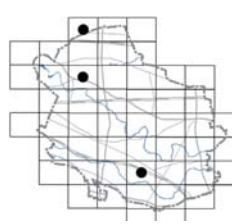
第8次調査では、ミシシippアカミガメとクサガメが確認されました。特定外来生物に指定されているウシガエルは確認されませんでした。



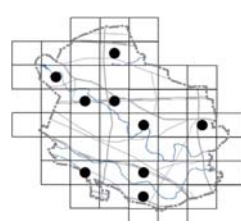
クサガメ



ミシシippアカミガメ



クサガメの確認地点



ミシシippアカミガメ
の確認地点

杉並区の両生類・は虫類の特性

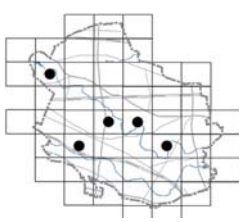
ニホンスッポンは、善福寺川と神田川において確認されました。また、ヒバカリ、ヤマカガシは水辺環境への依存度が高く、区内では善福寺川や神田川、玉川上水などで、これらの種類の生息が可能な良好な水辺環境が維持されていると考えられます。



ニホンスッポン
(環境省 DD / 都 CR+EN)



ヒバカリ (都 VU)



ニホンスッポン
の確認地点



ヒバカリ
の確認地点



ヤマカガシ
の確認地点

ほ乳類



調査結果の概要

第8次調査で確認されたほ乳類は、アズマモグラ、アブラコウモリ、タヌキ、クマネズミ、ドブネズミおよび外来種であるアライグマ、ハクビシンの4目6科7種類でした。



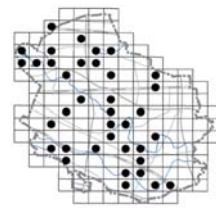
タヌキ



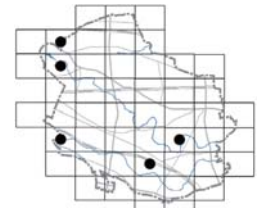
ドブネズミ

注目種

アズマモグラは、東京都のレッドリストに該当する注目種です。アズマモグラは第1次調査では区内で広く確認されていましたが、第8次調査では河川沿いの公園や緑地など限られた場所でのみ確認されませんでした。本種の餌となる生物の豊富な土壌が、開発により減少したことが主な要因と考えられます。



第1次 (1985年、1986年)



第8次 (2023年)

アズマモグラの分布の変化

外来種

第5次調査から、ハクビシンが確認されました。移動能力の高いハクビシンは、区内の広い範囲に定着していると考えられます。また、特定外来生物のアライグマも第5次調査で初めて確認され、第8次調査で再確認されました。



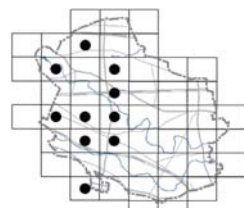
ハクビシン



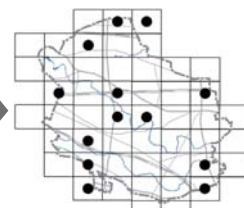
アライグマ

杉並区のは乳類の特性

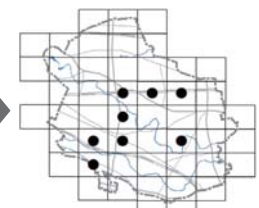
ハクビシンの分布は第6次から第7次にかけて拡大しましたが、第8次には北部で確認されませんでした。一方、在来種のタヌキの分布は、第6次調査に比べ半分以下に減少しました。外来種のハクビシンやアライグマは、雑食性で繁殖力が強く、タヌキをはじめ在来の動植物への影響や農作物被害などが懸念されます。



第6次 (2012・2013年)



第7次 (2018年)

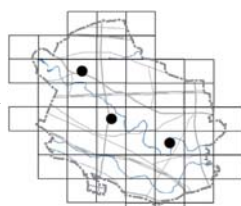


第8次 (2023年)

ハクビシンの分布の変化

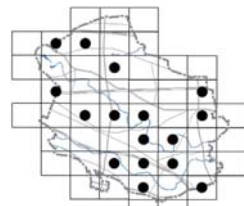


第5次 (2005・2006年)

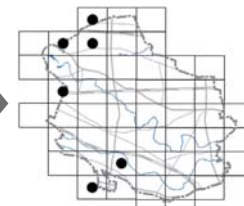


第8次 (2023年)

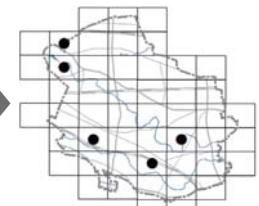
アライグマの分布の変化



第6次 (2012・2013年)



第7次 (2018年)



第8次 (2023年)

タヌキの分布の変化

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

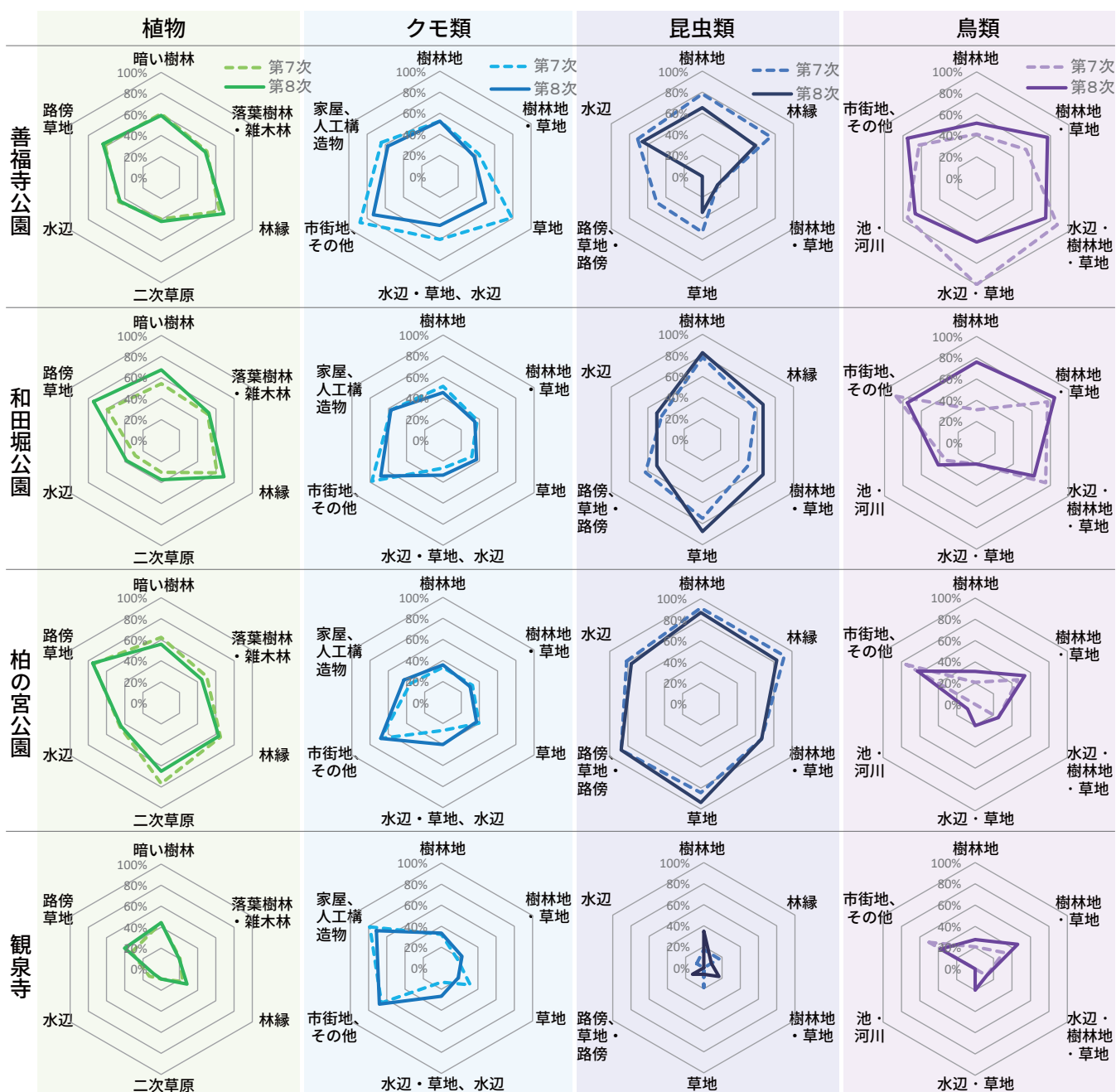
両生類・は虫類

ほ乳類

調査地からみた生物相の特性

主な調査地点で確認された種類を、それらが生育・生息する環境タイプに分類し、各調査地点の生物種の充実度をレーダーグラフにより比較しました。グラフが大きいほど生育・生息する種類数が多いことを示しています。

その結果、大規模緑地である善福寺公園では植物、クモ類、昆虫類、鳥類の各分類群の種類数の割合が全体的に大きい傾向が示されましたが、昆虫類のコオロギ類が第8次には確認されず、路傍、草地・路傍タイプの種類数の割合が低下しました。草地ややぶの創出事業が行われている和田堀公園では多くの環境タイプで植物や昆虫類の種類数の割合が増加し、また樹林性の鳥類の増加が顕著にみられました。柏の宮公園では、植物と昆虫類の多くの生育・生息環境タイプの種類数の割合が大規模緑地よりも大きく示され、植物保護や稲作などの区民による管理の取組が反映されていると考えられます。観泉寺などの社寺では昆虫類が少ない一方、クモ類が多い傾向にあり、古くからある社寺はクモ類の生息環境として重要であることが示されました。



※ グラフの種類数割合(%)は、第7次と第8次の調査地全体で確認された各環境タイプに属する種類の総数を100%として、調査地点で確認された各環境タイプに属する種類数割合を示します。また実線は第8次、破線は第7次の結果を示します。

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

両生類・は虫類

ほ乳類

自然環境調査のまとめ

杉並区は起伏の少ない台地上にあり、東西に4本の小河川が流れ、河川沿いが浅い谷となっています。区の全域で市街化が進み、善福寺川や神田川沿いなどには自然性が高くまとまりのあるみどりが残されていますが、それ以外では屋敷林や社寺林、個人の庭などの小規模なみどりが点在しています。

これまでの調査から、杉並区では、残された緑地や水辺などに依存している生き物と、市街化された場所にも適応できる生き物が生育・生息していることがわかりました。

杉並区の環境の変化

杉並区は、少なくとも明治時代のころは「武蔵野の雑木林」のある農村であり、多くの生き物が生息する豊かな里の自然が広がっていました。その後徐々に市街化が進み、区域のほとんどが市街地となり、現在は大きなもので10ha前後の緑地が善福寺川や神田川に沿って残されている状態になっています。また、地球温暖化やヒートアイランド現象により気温が上昇傾向を示し、さらに湿度の低下などにより、土地の乾燥化が進みつつあります。一方、近年都市域では植栽地が増加し、河川の水質が改善するとともに、生物に配慮した整備や管理が行われています。区内でも柏の宮公園、善福寺公園、和田堀公園などで環境改善の取り組みが続けられています。また直近ではナラ枯れの発生や被害木の伐採により樹林環境に変化が見られました。こうした様々な環境の変化とともに、生き物たちの生息状況も変化しています。



和田堀公園に創出された草地とやぶ

生き物たちの変化

■ 植物

第8次調査では、これまでほど大きな変化はみられなかったものの、多くの調査地点で在来種の種類数が増加しました。確認された植物の多くは主に都市域で見られる種類ですが、良好な自然環境にみられる植物の生育も維持されています。近年の雑木林の皆伐更新やナラ枯れ被害木の伐採などにより、樹林環境が明るく変化した場所では、林縁や草地を主な生育地とする種類の増加も見られました。一方、多くの調査地の路傍などを中心に、帰化植物や逸出植物の増加傾向も続いています。

■ 動物

動物相の確認種類数は、第5次に大きく増加し、その後は高止まりの状況にあります。昆虫類やクモ類、また鳥類では、近年の都市域での環境の改善により戻ってきた種類や、温暖化の影響により定着出来るようになった種類、人為的な移入種などの増加が見られました。一方、アズマモグラやスズメなどのかいつて広域に分布していた種類の分布の縮小や、土壌性のクモ類の減少など、生物の生息条件が低下している傾向も前回に続けて見られました。

多様な生きものを育む取り組みに向けて

区民自らが公園の管理に取り組んできた柏の宮公園をはじめ、善福寺公園、和田堀公園などの定期的に管理されている緑地は、生物相が豊かになり、区内の生物多様性保全の拠点として重要な役割を果たしています。また、古くからの社寺林に加え住宅地においても、植栽地や池など小規模ながら自然的な環境が存在することが、杉並区の生物相の多様性に寄与していると考えられます。今後も住宅地を含め、それぞれの緑地において生物に配慮した環境の整備や保全への取り組みを進めるとともに、長期的には自然性豊かな緑地を増やしていくことが、杉並区の多様な生き物を育むことに繋がると考えられます。

自然観察のポイント

自然環境の状態や変化を知る

多様な生き物が生育・生息するためには、樹林、林縁、草地、水辺などの環境が存在し、これらの環境の状態や変化を知ることが重要です。その環境で指標となる生物「指標生物」を選定し、生き物の動向を把握することで、その場所での環境の豊かさを知ることが出来ます。

指標生物

指標生物とは、その生物がその場所に存在するかどうかを把握することによって、環境の質を知ることができる生物を指します。つまり、指標生物は環境をはかる“ものさし”として活用することができます。杉並区の指標生物の一覧を下記に示しました。

特徴的な環境である自然環境（樹林、林縁、草地、水辺、緑の多い市街地）を指標する種類と、環境の変化（大気汚染、水質汚染、都市化、温暖化）を指標する種類を、なるべく区民のみなさまにわかりやすく、記録が得られやすい生き物から選んでいます。例えば、樹林環境の指標生物のカラスアゲハやウグイス等が少なくなるということは、樹林が全体的に減少している、樹林の規模が小さくなっている、樹林内が単調な構成になっていることなどを示します。

杉並区の指標生物

指標の対象		植物		クモ類	昆虫類		鳥類	両生類	爬虫類	哺乳類	
自然環境の質（環境の豊かさを指標する種）	樹林	屋敷林 社寺林	フタリススカ ハエドクソウ ホウチャクソウ	ヤブコウジ ノキシノブ	コガタコガネグモ オニグモ ギンメッキゴミグモ	カラスアゲハ	サトキマダラヒカゲ	コゲラ ウグイス エナガ	-	-	-
		雑木林		ガマズミ ヌスビトハギ	ワキグロサツマノミダマシ ジョロウグモ カグヤヒメグモ		クワガタムシ類		-	-	-
		豊かな 林床	-	キンラン ギンラン シュンラン	スネグロオチバヒメグモ ウラシマグモ類 イタチグモ		アシナガアリ		シロハラ アオシ	アズマヒキガエル	-
	林縁	キイチゴ類 （モミジイチゴ・ニガイチゴ等） サルトリイバラ ミツバアケビ クス		ジョロウグモ ワキグロサツマノミダマシ ビショオニグモ チャイロアサヒハエトリ ワカバグモ		ウラギンシジミ		モス ジョウビタキ	-	トカゲ類	-
		草地	ススキ チガヤ ヤブカンソウ・ノカンソウ ワレモコウ カントウタンポポ		コモリグモ類 ナガコガネグモ ササグモ ハナグモ コハナグモ		ベニシジミ		-		-
	水辺		水生植物 の生える 水辺	ガマ類 イ（イグサ）※ ヨシ セリ ミソソバ オギ※	アシナガグモ		ハグロトンボ ショウジョウトンボ		カルガモ カワセミ	-	-
		木陰の 多い水辺		-	-	オオシオカラトンボ		-		-	-
		緑の多い 住宅地	-	コクサグモ ジョロウグモ ササグモ	クロアゲハ		オナガ	アズマヒキガエル	ニホンヤモリ	アブラコウモリ	
	環境変化	大気汚染	スギ※ （大気汚染に弱い）	-	ヒグラシ	-	-	-	-	-	
		水質汚染	オランダガラシ※	-	アメンボ類	-	-	-	-		
都市化		セイヨウタンポポ※ ハルジオン※ ヒメジョオン※ チチコグサモドキ※ ウラボシコグサ※ ナガミヒナゲシ※ オオブタクサ※ ワルナスビ※	キシノウエタテグモ イエユウレイグモ ネコハグモ シロホシヒメグモ※ マダラヒメグモ※ サトヒメグモ イエオニグモ	チャドクガ	ツバメ	-	ニホンヤモリ アオダイショウ	アズマモグラ			
		温暖化	開花・紅葉・落葉の時期 南方系植物の野生化 （シュロ・ヤツデ・アオキ）						アダンソノハエトリ クロマルイソウグモ マルゴミグモ スズミグモ アジダカグモ セガタアリグモ マダラフクログモ	クマゼミ アオドクガネ ムラサキツバメ クロコノマチョウ セミ類の発生時期	渡り鳥の 去来時期

*表中の凡例

外：外来種

※：杉並区の地名の由来となっている種類

斜字：生育・生息することが「環境変化」の進行を指標する種類

植物

クモ類

昆虫類

鳥類

両生類・は虫類

ほ乳類

■ 自然環境の質を指標する種類

■ 樹林の指標生物

屋敷林・社寺林



ヤブコウジ

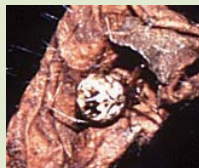


ノキシノブ

雑木林



ガマズミ



カグヤヒメグモ

豊かな林床が維持された樹林



ギンラン



アズマヒキガエル

樹林内の明るさや林床管理の状況に応じて、指標生物は異なり、屋敷林や社寺林などの暗い樹林で見られる種類、雑木林で見られる種類があります。また、ギンランやアズマヒキガエルなどは豊かな林床が維持された樹林で見られます。

■ 林縁・草地の指標生物

林縁



キイチゴ類



クズ



ウラギンシジミ

草地



ヤブカンゾウ



ササグモ



ベニシジミ

林縁部には、キイチゴ類などの低木やクズなどのつる植物がみられます、ウラギンシジミはクズなどに依存するチョウ類で林縁の指標となります。適切に管理された草地には、明るい環境を好む植物がみられ、それらに依存するクモや昆虫類がみられます。ベニシジミはスイバやギシギシに依存します。

■ 水辺環境の指標生物



ガマ類



ハグロトンボ



オオシオカラトンボ

水生植物が繁茂する水辺にはトンボ類が多く見られます。

■ 緑の多い住宅地の指標生物



クロアゲハ類



オナガ



ニホンヤモリ

人家の周りでもみられ、樹木や緑の多い住宅地の指標となります。

■ 環境変化を指標する種類

大気汚染



ヒグラシ

水質汚染



アメンボ類

都市化



ヒメジョオン



キシノウエタテグモ



アズマモグラ



アオダイショウ

ヒグラシは、スギなどの針葉樹の周辺でみられ、大気汚染によりスギの木が弱ると減少します。ワルナスビなどの帰化植物やキシノウエタテグモなどの建物周辺を好む種類の増加は、都市化の指標となります。アズマモグラやアオダイショウなどは、都市化が進むと減少します。

温暖化



シュロ



アオキ



マルゴミグモ



クロマルイソウロウグモ



クロコノマチョウ



ムラサキツバメ

南方系の種類で、温暖化が進むと増加します。

協力

植 物 : 杉並植生新研究会

クモ類 : 杉並蜘蛛研究会

昆虫類 : むさしの自然史研究会

鳥 類 : むさしの自然史研究会

両生類・は虫類・ほ乳類: 身のまわり調査員の皆様

写真提供協力: 大原庄史 佐藤康子 佐藤良平 新海栄一
須田真一 竹市幸恵 中村忠昌 宮内隆夫

とりまとめ : 株式会社 愛植物設計事務所

杉並区自然環境調査報告書(第8次)概要版
令和6年度版

令和7年3月発行

編集・発行 杉並区環境部環境課

〒166-8570 杉並区阿佐谷南一丁目15番1号

TEL (03)3312-2111(代)

☆杉並区のホームページでご覧になれます。

<https://www.city.suginami.tokyo.jp>

登録印刷物番号

06-0120